

ジャガイモ

種イモの準備は2月から
初心者でも手軽に収穫できる



用途が広く、知名度抜群の早生品種「男爵芋」

原産地は標高3000～4000mの高原地帯で、涼しい気温を好みます。日本では春や秋に栽培し、苦手な夏と冬はイモの姿でやり過ごします。

春は平均気温が10度の頃に出芽するよう、種イモはその20日ほど前に植え付けます。

この植え付けのさらに20～30日前に始めたいのが「浴光催芽（よくこうさいが）」です。イモに太陽光を当て、ずんぐりした芽を作ります。出芽や生育がそろい、病気予防にもなり収穫するイモの品質や収量が高まります。

出芽後10日ほど、土の中では種イモから伸びた茎の少し上の部分からイモになる茎（ストロン）が横に伸びてきます。さらに10日ほどでストロンの先にイモができて始まります。この2回のタイミングで土を足します。茎葉が黄変してから収穫すると品質の良いイモが採れます。

【基本情報】

- 分類**：ナス科ナス属
- 原産地**：南米ベネズエラからアルゼンチン北部にかけての高原地帯
- 萌芽適温（地温）**：15～20度
- 生育適温（気温）**：15～20度
- 日当たり**：日なた/半日陰
- 好適pH**：5.0～6.5

【病害虫情報】

アブラムシ類：ウイルス病などを媒介。早めに薬剤を散布し、発生前に収穫する。

ニジュウヤホシテントウ：背中に28個の黒い斑点のあるテントウムシ。5月中旬以降に増加。葉を食害する。

ジャガイモの栽培方法

1. 浴光催芽と種イモの調整

浴光催芽の頃、外はまだ寒いので、処理は日当たりの良い室内で行う（写真1）。60gを超える種イモは、植え付けの3～5日前に芽の集まった頂芽部分を中心に1片が30～60gになるよう縦に切り分ける（写真2）。植え付け後に切り口から腐らないよう、切り口は乾かしコルク化させておく。

ポイント

60g未満の小粒の種イモを使えば、調整やそれによる病気の感染もなく便利。

2. 種イモの植え付け

コンテナは、14L程度の市販の培養土の袋をそのまま使う。後で約15cm分の土（約6L）を足す（増し土）ので、その分の土はよけておく。袋の底に水抜きのための穴を4、5カ所開け、口は縁を巻き下げる（写真3）。次に植え穴を8～12cmの深さで掘り、そこへ化成肥料（NPK各成分8-8-8）約17gを入れる。周りの土を3cmほど戻し、土の表面からイモまでの深さが3～5cmになるよう種イモ1個を植え付け（写真4）、適宜水やりをする。

ポイント

種イモは頂芽が上に、切り分けた場合は切り口を下にして植え付ける。

3. 増し土と追肥

出芽後10日で厚さ5cm分の土（約2L）を足し、ストロンが伸びるスペースを確保する。このとき、化成肥料（8-8-8）約7gを施しておく（写真5）。さらに10日で縁を上げて厚さ10cm分の土（約4L）を足してイモが緑色になるのを防ぐ（写真6）。

ポイント

植え付け後20日ほどで土から芽が出始める。出芽後7日以内に元気の良い茎を3、4本残し、他は株元を手で押さえ引き抜く。

4. 収穫

茎や葉が完全に黄色くなり、茎が倒れる頃、晴れた日に掘り出すことで、でんぷんが豊富で貯蔵性の高いイモが収穫できる（写真7）。

ポイント

収穫したイモは、半日ほど陰干しして、土を落とすと保存性が高まる。



栽培カレンダー

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下
寒地 寒冷地			○	✕				■	■	■		
温暖地		○	✕			■	■	○	✕		■	■
暖地	○	✕			■	■		○	✕			■

○ 浴光催芽 ✕ 植え付け ■ 収穫

※温暖地を基準に記事を作成しています。